
帝国シルベニア記

ウエイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帝国シルベニア記

【Nコード】

N4088R

【作者名】

ウエイト

【あらすじ】

大きく四の国のあったアデルフィア大陸は安息の時代を迎えていた。しかし嘗て大陸一の国力を持ち、内乱の後派閥に別れ小競合いをしていたディクター郷国が突如として復興を宣言。急な動きに警戒を抱き、セヘルマギア王国、ヴィヴロス皇国、シルベニア帝国三国は事態に備えていた。そんな中、頭を抱える帝国に転機ともいえる報告が。楽しむ為なら死者をも喰らうと称された伏辰 博雅の存在だ。

只今大幅修正中。

第零章 宣言（前書き）

修正中です。またの機会にお読みください。

第零章 宣言

地に聳え立つ三つの白き塔。

その中で最も高い塔、タフリートにて宣言される。

「よって此処に、ディクター郷国復興を宣言する！」

——うおおおおおっ！！ ……バン……バンバン！

資源の豊富な土地に咲くといわれる大木、アブヤド。

平開形の白い花びらが空火に混じり花開く。

咆え叫ぶ地の子に少女が手を振った。

白い。何よりも白いその肌に銀の髪が靡く。

その姿は地の子等にも映る。

「おい。余計な事はするなと言った筈だ」

宣言者シャオクが少女——地の王ソフィアに注を刺す。

だが彼女は、王は振り返らない。

その目は、深い瞳の奥で地の子を観ているのだ。

「……ソフィア、余計なことを……」

「士気を高めて何か悪い？」

「今士気を挙げるのは兵にとって負担となりえる」

手を止めた。そしてこちらを向く。

「この戦いは苦戦しそうだね。うん、間違いないよ」

「……………苦戦？ 確かに相手は富・兵・智を持つ三国だ。油断はしない」

少し考え、目を向けた時彼女はいなかった。

このようなことは今までに何度があった。

二番目に高い塔。ウィラーダを見つめる。

「セヘルマギア王国、ヴィヴロス皇国、シルベニア帝国。相手はとも強大だ。けど、僕だってそう簡単に諦めはしない」

今はまだ三国にどれも劣るが直ぐに追いつく筈だ。

そして喰らい、食い殺す。その時、僕の願いも……

『旧ディクター歴35年』 此処にディクター郷国復興が宣言された。

■

■

「あれでは兵が疲れてしまう。一体アイツは何を考えているんだ？」

シャオクの宣言より一月。

その勢力は分裂前のディクター郷国と遜色無い大きさとなっていた。

「^{シャオク}宣言者は偽りの平和を唱え、我が国と同盟国である二国に進軍を始めた。既に幾つか関所は落とされ、その刃は我が国の目の前へと伸びている……だが、この先奴らがこの地に踏み入ることは無い！」

足まで伸びた黒いフードの帽子を脱ぎ青年が語る。

此处、シルベニア帝国にとって彼の存在は決して小さいものではない。

帝国の道は青年に懸かっているのだ。

……不甲斐無いと思うがこれも帝国の為だ、目を瞑ろう。

しばらくして演説を終えた青年が此方にきた。

「何故兵を煽ったのだ。これでは兵に負担がかかる事ぐらいわかるだろう？」

「……解らないか？ まず一つに此処の兵達は狩はしても人間は相手取った事が無い。実践が無い人間は実践した人間とあらゆる面で劣る」

経験、決意、覚悟、考え、動き、連帯……

「シルベニア帝国は兵の錬度が高い……が、正直言えばそれだけだ。相手は既に一月という短い期間で国を一応には纏めて三国に喧嘩を仕掛けてきたんだ」

「それは……だが、先に落とされた関所と違い冠漏水にはレイド將軍、そして今から向かう二ーヌ副將が率いる軍の前では……」

「確かにあの二人は頭も切れるし強いだろう。だが軍は違う」

そこまで言って青年が立ち上がる。

……顔を深く覆いニヤついた表情で。

何故、明君といわれる父上がこの様な男を入れたのかまだ分からない。

話に出た御二方は反対もせず頭を下げるという考えられない事もなされた。

「カカカカ……後一つは宿題だ。俺が付いたからにはこの戦、ただ一度の敗北も無いと思え」

ニヤついた口が宣言した。不確定でよく変わる苦手な笑いと共に。

第一章 帝国 修正中

シャオクによる宣言から二週間。
様子を窺っていた帝国に知らせが入る。

「……………間違いないのか？」
「ええ。宣言から二週間、国は一応に纏まっています」

この間を黙って見ている帝国ではない。
宣言の二日前にはセヘルマギア ヴィヴロス二国と密会をし、密かに同盟を組んでいた。

露見はしなくていい。あくまで探れば出る程度でいいのだ。

その間も会議を開いていては出来る限りの策は練っていた。

「思うより早い。こちらもすでに一つ落とされた」

「皇国は一つ、王国で二つ。流石としか言えませんか」

「ああ。だからこそ、一刻も早く例の者を此处へ呼ばねば……」

凶報のなか帝国の王の耳に入った一つの知らせ。それは王にとっての小さな光となる。

大陸四国において切り札とも言える降臨の間にて召喚の儀の成功。幾百年ぶりの召喚で成功したのは幸いとも言えよう。

だが情報が漏れていたのだろう。

場に近いクリープ領から三千の兵が進行してきたのだ。

できる限り護衛を付けて巫女を送り込んではあるが九十にも満たない。

馬を走らせたとしても応援には三日と掛かる。

「現在アフィス副将とユニ隊が向かっております」

「何としても守らねば……我らの、大陸の行く末を和に導く為にも……」

帝国から少し離れた村に、男はいた。

「伏辰様、本当に大丈夫なのですか？」

「相手は三千しかない」

三千もいるんです、と言う言葉を巫女は呑み込む。

二人がいる部屋の外からは護衛達の声が荒々しい声が聞こえてくる。

男が召喚されたのは今から三刻程前。

召喚に成功した巫女の歓喜の声はすぐに消された。

「巫女様！ 偵察から伝令、クリープ領より三千の兵が進行中！」

「……やはりばれていましたか。勇者の召喚は無事成功しました。急いで撤退の準備を……」

国王からその辺りについては聞いていた。

故に護衛は八十と逃げることを前提に少なくしたのだ。

巫女が走りさった護衛を見ていると声をかけられた。

「おい、俺をここは何処で、呼んだ理由は何だ？」

「勇者様。今しばらく御待ちを……」

「いや待たない。先ずここは何処だ？」

否とは言わせないその言葉に、巫女が膝を突き頭をさげゆっくりと話す。

「ここはシルバニア帝国、王都から南に位置する召喚の間です。なぜ召喚されたか、その詳細は私にはいえません。そして今、私達がいる場に敵国であるディクター郷国の貴族、クリープより三千の兵が進行しています……ですから、急ぎこの場を！」

巫女がそこまで言っつて男が何か考え事をし始めた。齒噛みをする。

帝国では立場上、巫女より男が上となる。

ましてや先程最上礼をとったばかり。

今ここで自分が不敬と取れる行動を起こせば間違いなく死刑だろう。

それだけ帝国において男の存在は大事なのだ。

しかし、このままでは自分と護衛。男も無残に殺されてしまう。

「勇者様、考え事は後にて急ぎ撤退を……」

「ふせたつ伏辰 はくが博雅、それが俺の名だ。巫女、急いで護衛の隊長格及び参謀を呼べ、今すぐにだ！」

「御言葉ですが勇者様！ 今その様な時間はありません！」

「俺は三度言わん。呼んで来い」

逆らう事はできない。

渋々ながら呼びに行く。

五分とせず四人の男達が駆けてきた。

焦りと緊張、困惑した表情で今回の任にて護衛長を務めるダラスが巫女を見やる。

集まったのは残り護衛長と医療長、その補佐だ。

「これで全部か？ 敬語など要らんからよく聞け。まずお前達の役職、そして部隊編成及び人数と所要武器、物資を言え」

「……………巫女様？」

「すみません。答えてください」

巫女の隣で堂々と言い張る男に面食らったダラスだが簡単に説明する。

「自分はこの度の任にて護衛長を務めるダラスだ。お前が誰か知らないが……………今回護衛に与えられた兵は八十。その内六十八名が指揮下で六名が馬車、補給に携っている。弓が十、槍が二十、残り三十二名が剣を持つ」

「私は今度の任にて医療長を務めるシーナと申します。医療班は九名、五対四で外部、内部と分けての編成としています」

「後に二名は？」

「それは私達巫女三名です」

六十八、時代が……………なら。考えること一瞬。

伏辰がニンマリと笑いながら口を吊り上げる。

「巫女、お前達は魔法といった異質な力はがえるのか？」

「魔法がどういったものか知りませんが……………。神の言葉、神子じんしの語にて風を起こすなどはできます」

「風を起こしたいのだが、どれ程のものだ？」

「現状、突風となると一時、風を起こす程度でしたら半刻程」

「それでいい。今からお前達は俺の指示に従ってもらう」

指示に従ってもらう、その言葉にダラスが反応した。

「いや、まて、指揮官は自分だし……迎え撃つ気か？」

「その通りだ。国からの援護は数日かかると見た。なら逃げて合流するより迎え撃ち首を獲る」

「無茶だ！ 相手は三千、それもただの訓練兵ではなく洗礼された本物の騎士なんだぞ！？」

彼の反応は皆の思った言葉そのものだった。

百を切る自分達が帝国の援護を待つばかりか三千の敵に立ち向かうなど……

「確かに兵数は圧倒的、腕はかなり立つ。だがそれは隊を指す言葉であり長を指す言葉ではない」

……確かに、現クリープ領当主は幼いと聞いている。

まだ十にもなっていない。珍しいことで有名だ。

「巫女様、勇者様！ 指示されたよう準備、終了いたしました！」

若い兵が申し上げる。

指示を受けて二刻半、あと半刻で敵も見える。

ギリギリではあったがダラスの指示が上手かったのもあり想像以上によくいった。

後は相手次第だ。

三千の兵の参謀を務めるザイガードは笑いが止まらなかった。

今回の進行は独断。

少し前、宣言により国が形を取る前ならば問題ない行動だ。

しかし今は重罪、一族諸共死刑になり領地も他に取られるだろう。

「ベルズ様、今でも間に合います。引き返しましょう」

「何を言うミーフア？ この度の事は失敗などそんなざいしないようなもの、後は華が付くかどうか……」

「貴様には言っておらん。私はベルズ様に進言したのだ！」

「……………」

飾りの無い、実戦的な加工を施した鎧を着込む女性を宥める。

そこに声はないし女性も渋々従っている。

体にそぐわないブカブカの服に身を包んだ少年。それが女性の主だった。

「……………」

「いえ、私はベルズ様の命じるままに」

「……………」

黙りこくっている少年に頭をさげ話す光景を、詰まらなそうにザイガード見る。

詳しくは知らないが、現クリープ領主はまだ幼く声が出ないらしい。

そんな少年は神子の加護をその身に受け、波長の合う者と対話が可能としている。

それが先程自分に意見した巫女だ。

邪魔くさくてしょうがない。

今回の華の中にお前達の命も入っているのだ。

「勇者と言えど、呼ばれたばかりではまともな武器も力も無い。今その命を獲らずしていつ獲るおつもりで？」

「勇者にそのような考えは通じない」

第一章 帝国 修正中（後書き）

感想やアドバイスなどお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4088r/>

帝国シルベニア記

2011年11月18日05時45分発行